



優秀賞

本当のれきだい一位になる

射水市立大門小学校2年 長澤 歩乃

わたしの小学校では十月にマラソン大会がある。きょ年一年生だったわたしは、学年一位で、れきだい二位の記ろくだった。うれしかったけれど、ちょっとくやしかった。

今年はれきだい一位を目ざして、れんしゅうにとり組んだ。大会の日は、秋晴れで、気もちよくはしれる気がした。でも、一位になれるかふあんで、朝からドキドキしていた。スタートの時間が近づくと、ドキドキがどんどん大きくなっていった。ふえの音で、二年生女子がはしり出した。前半は二位ではしっていたけれど、一位の子が思ったよりはやくてあせった。「ぜったいぬかして一位になるんだ」と思いながら前を見てはしった。ゴールまで半分ぐらいのところでサツとぬいた。後ろから何でもぬかそうとしてくるのが分かった。力をふりしぼってにげて、わたしは一位でゴールした。もう足がうごかなかった。きつとれきだい一位をとれたと思い、うれしかった。でも、きゅう食の後、いつも元気な先生が、

「今日は、二年生の本当のきより三十メートル足りませんでした。れきだい記ろくを目ざしていた人がいたけれど、れきだいには入りません。」と、ひくい声でお知らせした。いみが分からなかった。一位になったのに、家に帰ってお母さんの顔を見たら、なみだがあふれて止まらなかった。あと三十メートルあっても、わたしはれきだい一位の記ろくだったと思う。がんばった記ろくがなくなってしまった。目あてにとどいたのに、とどかなかった。つぎの日から、先生は友だちとたくさんわたしのがんばりをほめてくれた。このくやくしてかなしい気もちを大切にして、マラソン大会がおわってもわたしははしっている。来年は、ぜったいに本当のれきだい一位になるんだ。そして六年れんぞく一位になるんだ。